

4. 内地留学生研修について

2017年度は、「特別支援教育」、「道徳」、「外国語（中国語）」の領域において、前期2名、後期2名の内地留学生を受け入れました。内地留学をされた先生方と、それぞれの研究テーマを以下に記載します。

【特別支援教育】

○矢板市立矢板中学校 大金 恵美子

1 研究テーマ

「発達障害の理解と効果的な支援」

～関連する機関の取り組みから学ぶ～

2 研究概要

(1) 特別支援教育が目指すもの

従来の「特殊教育」から「特別支援教育」への転換により、これまで対象の障害だけでなくすべての学校において、いわゆる知的障害のない発達障害も含めた子どもへの支援をさらに充実していくこととなった。「学校は、一人一人の教育的ニーズに配慮・対応していく」という「インクルーシブ教育」や「合理的配慮」についての具体的支援とはどのようなものなのか。発達障害の正しい理解や望ましい手立てとして「TEACCHプログラム」における構造化や、「応用行動分析学」、その他有効な支援方法について学ぶことができた。

(2) 調査研究：関連機関の取り組みから

特別支援教育関連の機関を見学し、個に応じた支援のありかたについて学んだ。

宇都宮大学教育学部附属特別支援学校では、教師の児童・生徒への関わりや具体的な支援について直接観察することができた。子どもの将来を見据え、必要な力を身に付けさせるための様々な取り組みや支援の工夫がとても参考になった。

作新こころの相談クリニックでは、専門機関としての役割や支援の実際について学んだ。ひとり一人の子どもを分析し、オリジナルの支援プログラムをつくるという考え方は、学校での特別支援教育にも通ずるものである。学校は保護者だけでなく、専門機関とも連携することで、より効果的な子どもの支援に結びつくと感じた。

巡回相談では、那須烏山市の2つの中学校を訪問した。那須烏山市では、特別な支援が必要な子どもへの対応として、学校・保護者・専門家のネットワークづくりに力を注いでいる。すべての子どもを全職員で支援していくという考え方で、効果的な支援が行えるように資料や支援体制も工夫されていた。

(3) 実践研究

本研修で学んだ応用行動分析学を用いて、発達障害の生徒の理解と適応行動を増やすための分析・実践を行った。効果的な支援を行うためには、アセスメントを充分にとり、生徒の認知特性や興味・関心を生かした方法で行うことが重要であるこ

とがわかった。生徒が自分の特性を理解し、得意なことは生かしつつ、苦手なことは何とか折り合いをつけていけるように、教師は様々な方法や工夫を生徒と共に考えていくことが大切である。

【特別支援教育】

○宇都宮市立桜小学校 田中 昌子

1 研究テーマ

「通常の学級における特別支援教育の充実」

～「気になるあの子」が「できた」「わかった」と実感できる授業づくり～

2 研究概要

小・中学校の通常の学級に在籍している児童生徒のうち、特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合が全体の約6.5%（文部科学省 平成24年の調査）という結果が報告された。「個別に指導するとわかるのに、一斉指導だとわからなくなってしまう。」「こだわりが強く、自分の思っているようにならないとパニックになってしまう。」など、このような話は以前からよく耳にしていることである。

特別な教育的ニーズに応じた教育を推進するために、全国の小中学校では校内委員会の設置や特別支援コーディネーターの指名がされるなど支援体制の整備が進んでいる。しかしながら、発達障害等特別な支援を必要とする子どもへの実際の指導はまだ十分なものではない。そこで、インクルーシブ教育システム、授業のユニバーサルデザイン化、応用行動分析学についての基礎を学び、学校現場でどのように生かしていくことができるかについて考察した。また、学んだことをもとに考えた教材教具を実際に使って学習支援をしながら、その子により適したものになるように工夫するなどの実践に取り組んだ。

その結果、通常の学級では、個に対する適切な支援を充実させるとともにそれだけでなく集団での活動や一斉授業の中での指導・支援の在り方についても配慮が不可欠であることが分かった。そして障害がある・ないという2分類で子どもを捉えたり子どもを教師の教え方に合わせようとしたりするのはなく、子どものわかりやすい・やりやすい学び方に教師の教え方を合わせるという発想の転換をしていくことが大切であるとわかった。そのため、その子にとって最適の「1つ」の解決方法を見つけるための「複数のアプローチ」を用意していくことが必要であると考えられる。

3 研修内容

(1) 学内講義

発達障害児の心理と教育（高浜） 知的障害者教育法2（野村） 臨床心理学（狐塚）
知的障害児・者生理心理学（日高） 病弱教育（栗山） 生徒指導論（木村）

(2) 主な研修先

- | | |
|--------------|--------------|
| ①那須烏山市立荒川小学校 | ②那須烏山市立烏山小学校 |
| ③那須烏山市立七合小学校 | ④那須烏山市立烏山中学校 |

- ⑤こころの相談クリニック（作新学院大学内） ⑥国立武蔵野学院
 ⑦茅ヶ崎市立浜之郷小学校 ⑧文京区立昭和小学校
 ⑨社会福祉法人「希望の家」 ⑩筑波大附属大塚特別支援学校
 ⑪宇都宮大学教育学部附属特別支援学校 他

【道 徳】

○鹿沼市立西中学校 菅波 由紀

1 研究テーマ

「道徳教育及び道徳の授業の充実のために～多様で効果的な指導方法の工夫～」

2 研究概要

中学校では平成 31 年度から、これまでの道徳の時間が「特別の教科 道徳」になる。教科になることで、年間 35 時間という道徳科としての授業時間が確保され、「考え、議論する道徳」を実現するための質的な向上を図ることが求められている。そこで、「質の高い多様な指導方法」と「ユニットとしての指導」を中心に研究を進めた。

4 月・研究の計画立案（報告書の目次原案作成）

- ・渡邊弘先生の「道徳教育の指導法（中・高）」「道徳指導法（初等）」を受講（～7 月）
- ・大学生に小・中学校の道徳についてのアンケート（渡邊弘先生の講義にて毎年実施）
- ・教職員へのアンケート項目の検討

5 月・小・中学校 4 校の教職員に「道徳の時間について」のアンケート依頼

- ・「質の高い多様な指導方法（①読み物教材の登場人物への自我関与を中心とした学習，②問題解決的な学習，③道徳的行為に関する体験的な学習）」について研究・まとめ（～6 月）
- ・小林千枝子先生の「特別活動の指導法（中・高）」を受講（～6 月※「LGBT 問題」）
- ・宇都宮市立陽南中学校の校内研究会（道徳）に参加

6 月・教職員からのアンケート回収・まとめ

- ・宇都宮大学教育学部附属小学校の公開研に参加（6 年道徳，3 年道徳）
- ・福島大学附属中学校の公開研に参加（3 年数学，2 年道徳）
- ・宇河地区中教研道徳教育部会に参加（2 年道徳）
- ・とちぎ道徳教育実践学会参加（坂本哲彦先生の講演）

7 月・「ユニットとしての指導」について研究・まとめ

- ・現代的な課題におけるユニットとしての指導案「多様な性について考えよう」作成

8 月・研究のまとめ（報告書作成・製本）

- ・「各教科・領域との連携における道徳授業の実践的研究～性的マイノリティの問題を教材として～」についてのまとめ（『教職実践センター研究紀要第 5 号』に掲載）

9 月・内留研究報告発表用 P P 作成

半年間の研究や講義等を通して、「考え、議論する道徳」に向け、多面的・多角的な思考

を促したり自己の考えを深めさせたりするための発問や話し合い活動などの工夫の仕方を学んだ。また、各教科や領域と関連させたユニットとしての指導もたいへん効果的であることがわかった。そして、授業を組み立てる際には「ねらい→中心価値→中心発問」のセンターラインが大切であり、そこには教師の指導観が必要不可欠であると感じた。

【外国語（中国語）】

○宇都宮市立今泉小学校 日永 朋子

1 研究テーマ

「外国人児童生徒に対する日本語指導及び適応指導の在り方」

2 研究概要

ここ数年、外国人児童生徒が増加する傾向にあり、日本語教室を担当している教員だけでなく、学級担任もこれらの児童生徒に接する機会が増えている。そこで、外国人児童生徒に対する日本語指導及び適応指導の在り方について研究し、今後の教育活動に生かしたいと考え、本主題を設定し、研究した。

以下の4つの方法で研究を進め、外国人児童生徒に対する支援・指導の在り方について考察した。

(1) 作新学院大学の中国語に関する講義を受講することを通して、教わる側から外国語教授法の実際を知るとともに、外国語の指導を受ける児童生徒の気持ちを考えた。その結果、学習者のレディネスやニーズを把握し、それをもとに学習計画を立て、指導中には、学習者の心理を考えながら、関わっていくことの大切さを学んだ。

(2) 作新学院大学の日本語教授法に関する講義を受講することを通して、在日外国人が抱える問題や日本語教育について理解を深めるとともに、日本語指導の方法を学んだ。外国人が抱える問題には、就労などの保護者に関わるものや、進学や学校への適応などの児童生徒に関わるものがあった。このような問題の把握に努め、児童生徒や保護者への対応に生かしていきたいと思う。日本語指導については、日本語そのものを指導するだけでなく、日本語指導と教科指導を結びつけて指導する方法も知り、どちらの方法についても模擬授業を行うことで、授業実施までの一通りの流れを理解することができた。

(3) 作新学院大学の異文化間コミュニケーションに関する講義の受講、留学生との交流を通して、異文化への理解を深め、よりよいコミュニケーションのとり方について考えた。その結果、文化が異なる人々との交流は、固定概念にとらわれずに行うことが大切だと学んだ。また、留学生と交流する中で、自分とは異なる習慣や価値観に触れ、自分の文化について改めて考えることもできた。

(4) 栃木県内の外国人児童生徒適応指導教室、初期日本語指導教室、日本語教室の見学を通して、各教室の実際の運営方法や児童生徒との関わり方を学んだ。学習面、生活面での支援、指導の計画的な進め方や在籍学級との関わり方、保護者への対応の仕方などについて実際に行われている様子を見たり、指導担当者の話を聞いたりすることで、今後の実

践につながる様々な情報を得ることができた。

本研究により得た知識や経験を、今後の教育活動に生かし、外国人児童生徒が、生活や学習で感じる困難さを少しでも解消できるように努力していきたい。